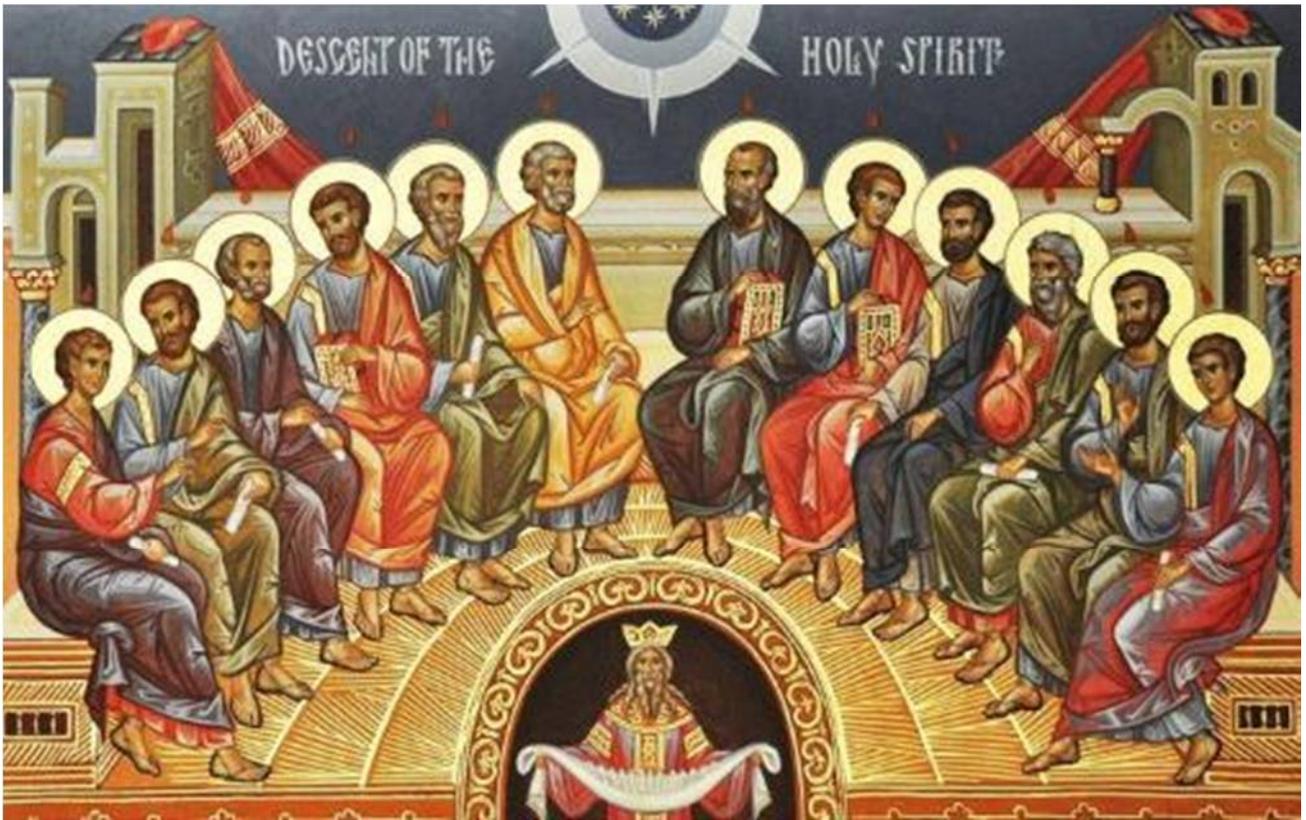


五旬祭聖体礼儀

単音聖歌譜



注意 譜面中、五線譜上に|○| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

2023年6月4日

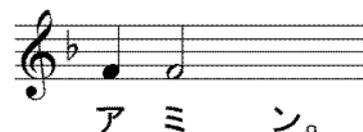
一部修正

釧路ハリストス正教会

管轄司祭ステファン内田圭一

司祭) (黙誦：天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所
 なき者よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居
 り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。
 至と高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、至と高
 きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、主よ、我が唇
 を啓けよ、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす、)

司祭) 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世世に、



【 大聯禱 】

司祭) 我等安和にして主に禱らん、



司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱
 らん、



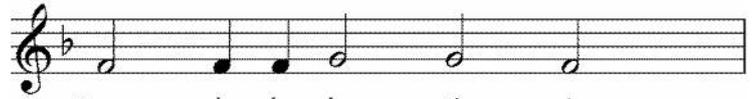
司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏る心とを以て此に来る者の爲に主に禱
 らん、



司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の

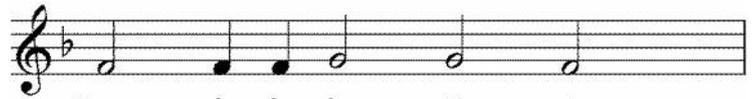
せんだい だいしゅきょう せいさい そんびん よ ほさいしよく ことごと
仙台の大主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの

きょうしゅう およ しゅうじん ため しゅ いの
教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



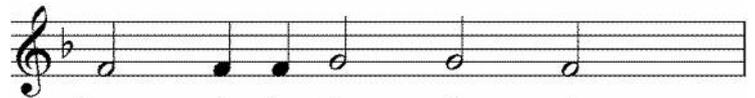
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの
司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



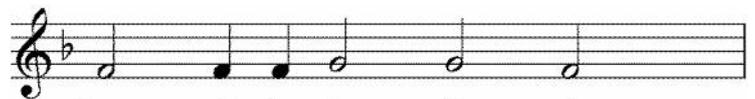
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

このまち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの
司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



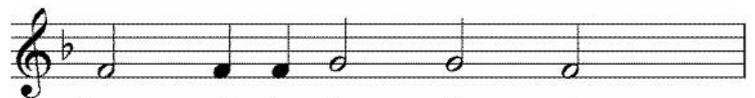
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの
司祭) 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



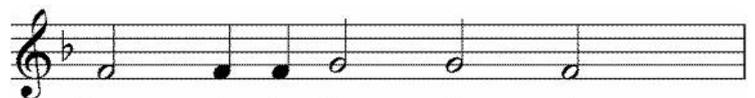
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの
司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、
および彼等の救の爲に主に禱らん、



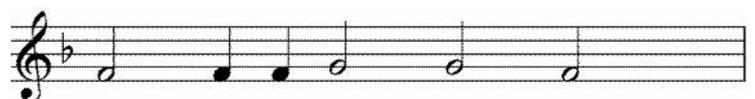
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの
司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 至^{しせい}聖^{しけつ}至^{いた}潔^{さんび}にして至^{われら}りて讚^{こうえい}美^{ちよさい}たる我^{しょうしん}等の光^{ちよ}榮^{えい}の女^い宰^{どう}、生^{ちよ}神^{ちよ}女^{ちよ}、永^{えい}貞^い童^{どう}女^{ちよ}マリヤ

と、諸^{しよ}聖^{せい}人^{じん}を記^き憶^{おく}して、我^{われら}等^{おのれ}己^みの身^{およ}及^{たが}び互^{おのおの}に各^みの身^{もつ}を以^{ならび}て、並^{ことごと}に悉^く

の我^{われら}等の生^{いのち}命^{もつ}を以^{かみ}て、ハリス^{いたく}トス神^{かみ}に委^{いたく}託^{せん}せん、



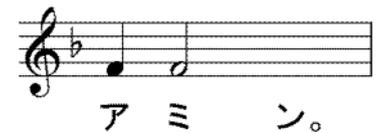
司祭) (黙^{しゅわ}誦^{かみ}：主^{なんぢ}我が神^{けんべい}よ、爾^{かたど}の權^{がた}柄^{こうえい}は像^{はか}り難^{がた}く、光^{なんぢ}榮^{じんじ}は測^{じんじ}り難^{じんじ}し、爾^{じんじ}の仁^{じんじ}慈^{じんじ}は

限^{かぎ}り無^なく、仁^{じん}愛^{あい}は言^いい難^{がた}し、求^{もと}む主^{しゅ}宰^{さい}よ、爾^{なんぢ}の慈^じ憐^{れん}に因^よりて、親^{みづか}ら我^{われら}等

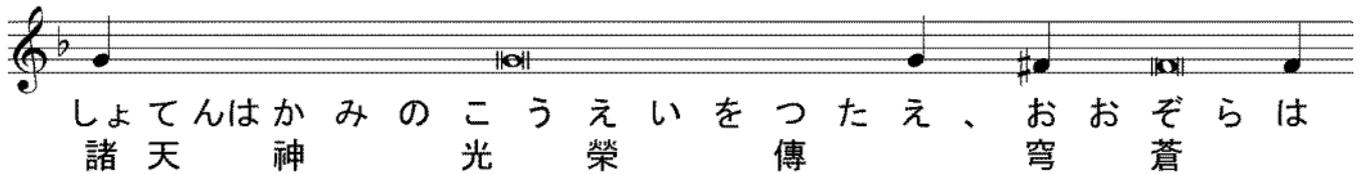
と此^この聖^{せい}堂^{どう}とを眷^{かえり}み、我^{われら}等^{およ}及^{われら}び我^{われら}等^{とも}と偕^いに禱^{もの}る者^{なんぢ}に爾^{ゆたか}の豊^{なる}

恩^{おん}澤^{たく}と爾^{なんぢ}の愛^{あい}憐^{れん}とを施^{ほどこ}し給^{たま}え、)

司祭) 蓋^{けだし}、凡^{およ}そ光^{こうえい}榮^{そん}尊^き貴^{ふく}伏^は拜^いは爾^{なんぢ}父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に歸^きす、今^{いま}も何^{いつ}時^よも世^よ世^よに、



【 第一アンティフォン 第18聖詠 第2調 】



きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによつて
 救世主 生神女 祈祷 因
 われらをすくいたまあえ。
 我等 救 給
 ひはひにことばをのべ、よはよにちをほど
 日 日 言 宣 夜 夜 智 施
 こす。

きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによつて
 救世主 生神女 祈祷 因
 われらをすくいたまあえ。
 我等 救 給
 そのこえのきこえざるげんごなく、ほうげんな
 其 聲 聞 言語 方言
 し。

きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによつて
 救世主 生神女 祈祷 因
 われらをすくいたまあえ。
 我等 救 給
 そのこえはぜんちにつたわり、そのことばはち
 其 聲 全地 傳 其 言 地
 のはてにいたる。
 極 至

きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによつて
救世主 生神女 祈祷 因

われらをすくいたまあえ。
我等 救 給

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
何時 世 世

きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによつて
救世主 生神女 祈祷 因

われらをすくいたまあえ。
我等 救 給

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅいの
我等復又安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) しせいしけつ いたさんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤ

と、しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならば ことごと
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉く

われら いのち もつ かみ いたく
の我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

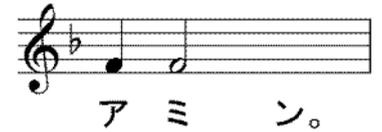
しゅなんぢに。
主 爾

司祭) (黙誦: ^{しゅわ かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい}主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會

^{じゅうまん まも なんぢ どう び あい もの せい なんぢ しんせい}の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の

^{ちから もつ かれら こうえい われらなんぢ たの もの のこ なか}力を以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、)

司祭) ^{けだしけんべいおよ くに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ}蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



【 第二アンティフォン 第19聖詠 第2調 】

ねがわくはしゅはうれいのひにおいてなんぢにき
願 主 憂 日 於 爾 聽
か ん。

じんじなるぶじゅつしゃよ、われらなんぢにアリルイ
仁慈 撫恤者 我等爾
やをたてまつるものをすくいたまあえ。
獻 者 救 給

ねがわくはしゅはうれいのひにおいてなんぢにき
願 主 憂 日 於 爾 聽
き、イアコフのかみのなはなんぢをふせぎまもらん。
神 名 爾 扞 衛

じんじなるぶじゅつしゃよ、われらなんぢにアリルイ
仁慈 撫恤者 我等爾
やをたてまつるものをすくいたまあえ。
獻 者 救 給

ねがわくはせいしよよりたすけをなんぢにつかわ
願 聖 所 助 爾 遣

し、シオンよりなんぢをかためん。
爾 固

じんじなるぶじゅつしゃよ、われらなんぢにアイルイ
仁 慈 撫 恤 者 我 等 爾

やをたてまつるものをすくいたまあえ。
獻 者 救 給

ねがわくはしゅはなんぢのこころにしたがいて
願 主 爾 心 循

なんぢにあたえ、なんぢのはかるところをことごと
爾 與 爾 謀 所 悉

とくとげしめん。
遂

じんじなるぶじゅつしゃよ、われらなんぢにアイルイ
仁 慈 撫 恤 者 我 等 爾

やをたてまつるものをすくいたまあえ。
獻 者 救 給

【 神の獨生の子 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
何 時 世 世

かみのどくせいの子ならびにことばよ、
 神 獨 生 子 並 言

しせざるものにしてわれらをすくわんがため
 死 者 我 等 救 爲

あまんじてせいなるしょうしんぢよ・えいていどうぢよ
 甘 聖 生 神 女 永 貞 童 女

マリヤよりみをとり、かみのせいをかえ
 身 取 神 性 易

ずしてひととなりじゅうじかにくぎうたれ、
 人 十 字 架 釘

しをもってしをふみやぶりしハリストスかみよ、
 死 以 死 踏 破 神

せいさんしゃのいつとしてちちとせいしんと共
 聖 三 者 一 父 聖 神 共

もにさんえいせらるるのしゅよ、われらをす
 讚 榮 主 我 等 救

くいたまあえ。
 給

【 小聯禱 】

司祭) ^{われらまたまたあんわ}我等復又安和にして^{しゅ いの}主に禱らん、

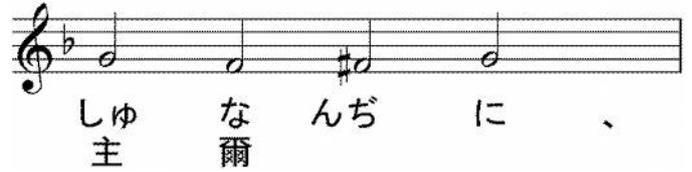
しゅあわれめよ、しゅあわれめよ。
 主 憐 主 憐

司祭) ^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾の^{おんちよう}恩寵を以て、^{もつ}我等を^{われら}佑け^{たす}救い^{すく}憐^{あわれ}み^{まも}護れよ、

しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤ

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと
と、諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの

われら いのち もつ かみ いたく
我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) (黙誦：われら こ こうどうわごう きとう たま かつ にさんになんぢ な よ あつ
我等に此の共同和合の祈禱を賜い、曾て二三人爾の名に依りて集まる

もの そのもと ところ たま やく しゅ なんぢみづか いま なんぢ しよぼく
者にも其求むる所を賜うを約せし主よ、爾親ら今も爾が諸僕の

ねがい そのりえき ため かな われら こんせ なんぢ しんり し らいせ
願を其利益の爲に應わしめて、我等に今世には爾の眞理を識り、來世に

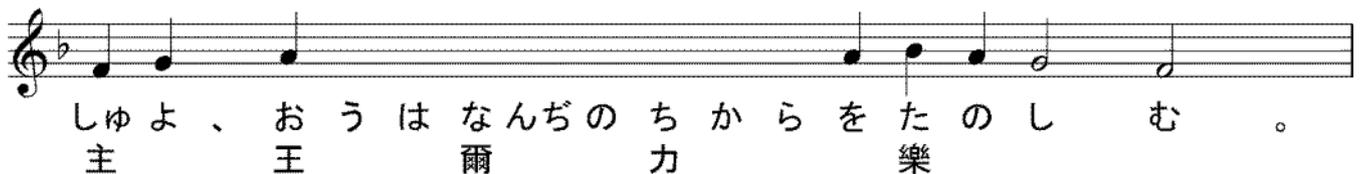
えいえん いのち え たま
は永遠の生命を得るを給え、)

司祭) けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま
蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今

いつ もよよ
も何時も世に、



【 第三アンティフォン 第20聖詠 第8調 】



え い は なんぢ に き す 。
榮 爾 歸

しゅよ、 おうは なんぢのちからをたのしみ、
主 王 爾 力 樂

なんぢのすくいをよろこぶこときわまりな
爾 救 歡 極

し。

あがめほめらるるかなリストスわれらのかみ
崇 讚 哉 我 等 神

よ、なんぢはぎよしゃにせいしんをつかわしてえい
爾 漁者 聖 神 遣 睿

ちしゃとなし、かれらをもつてせかいをぎよし
智者 爲 彼 等 以 世 界 漁

えたり、ひとをあいするしゅよ、こう
得 人 愛 主 光

え い は なんぢ に き す 。
榮 爾 歸

そのころにのぞむところは、なんぢこれをあ
其 心 望 所 爾 之 與

たえ、そのくちにもとむるところは、
其 口 求 所

なんぢこれをいなまざりき。
爾 之 辭

あがめほめらるるかなハリスト スわれらのかみ
崇 讚 哉 我 等 神

よ、なんぢはぎよしゃにせいしんをつかわしてえい
爾 漁者 聖 神 遣 睿

ちしゃとなし、かれらをもつてせかいをぎよし
智者 爲 彼 等 以 世 界 漁

えたり、ひとをあいするしゅよ、こう
得 人 愛 主 光

えいはなんぢにきす。
榮 爾 歸

けだしなんぢはじんじのしゅくふくをもつてかれ
蓋 爾 仁 慈 祝 福 以 彼

をむかえ、じゅうきんのかんむりをそのこう
迎 純 金 冠 其 首

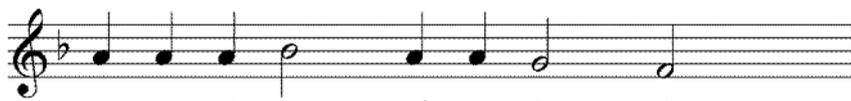
べにこうむらせたなり。
冠

あがめほめらるるかなハリスト スわれらのかみ
崇 讚 哉 我 等 神

よ、なんぢはぎよしゃにせいしんをつかわしてえい
爾 漁者 聖 神 遣 睿

ちしゃとなし、かれらをもつてせかいをぎよし
智者 爲 彼 等 以 世 界 漁

えたり、ひとをあいするしゅよ、こう
得 人 愛 主 光



え い は な ん ぢ に き す 。
 榮 爾 歸

司祭) (黙誦：主宰・主・我等の神、諸天に天使及び、天使首の品級と軍隊とを

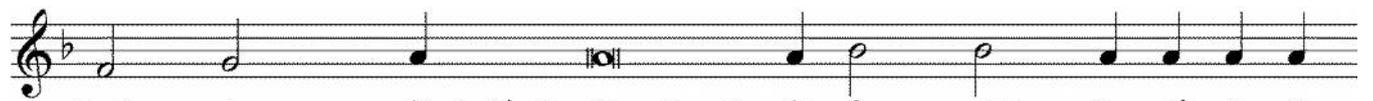
立てて爾が光榮の奉事者となしし者よ、求む我等の入るに伴いて、彼の

我等と偕に務め、共に爾の至善を讚榮する聖天使等の入るを致させ給

え、蓋、凡そ光榮尊貴伏拝は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、)

司祭) 睿智、肅みて立て、

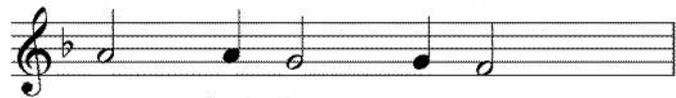
【 聖入の句 】



しゅ よ 、 なんぢの ち から を も っ て み づ から
 主 爾 力 以 自



あ が れ 、 わ れ ら は なんぢの けんの う を か
 擧 我 等 爾 權 能 歌

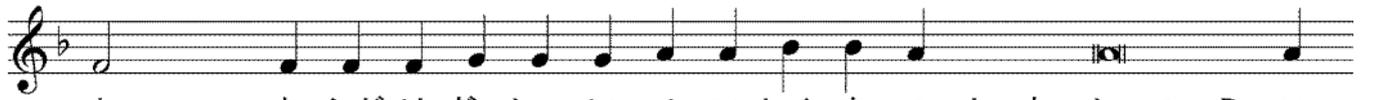


しよ さん え い せ ん。
 頌 讚 榮

【 五旬祭のアポリティキオン 第8調 】



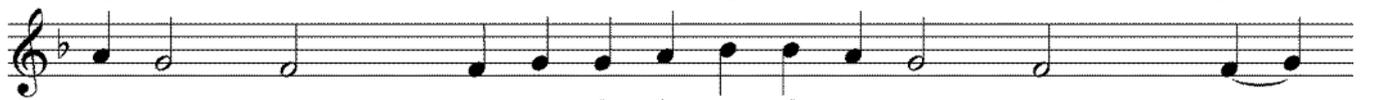
あ が め ほ め ら る かな ハ リ ス ト ス わ れ ら の か み
 崇 讚 哉 我 等 神



よ 、 なんぢは ぎよ しゃ に せ い しん を つ か わ し て え い
 爾 漁 者 聖 神 遣 睿



ち しゃ と な し 、 か れ ら を も っ て せ か い を ぎよ し
 智 者 爲 彼 等 以 世 界 漁



え た り 、 ひ と を あ い す る しゅ よ 、 こ う
 得 人 愛 主 光

え い は な ん ぢ に き す 。
 榮 爾 歸

【 五旬祭のコンダク 第8調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 。 い 今
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 何 時 世 世

し じ ょ う し ゃ は く だ り て し た を み だ し し と き 、 し ょ 諸
 至 上 者 降 舌 滑 時

み ん を わ か て り 、 ひ の し た を わ か ち し と
 民 分 火 舌 頰 時

き 、 し ゅ う を ひ と つ に あ つ め た ま え り 、
 衆 一 集 給

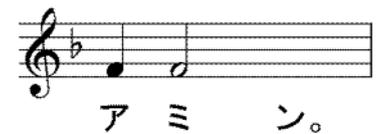
ゆ え に わ れ ら ど う い つ に し せ い し ん を さ ん
 故 我 等 一 至 聖 神 讚

え い す 。
 榮

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより 聖三の聲を以て歌頌せ
 られ、 ヘルヴィムより 讚榮せられ、 悉くの天軍より 伏拝せられ、 萬物を
 無より有となし、 人を 爾の像と 肖とに依りて造り、 爾が 諸の賜を
 以て之を飾り、 願う者に智慧と明悟とを 與え、 罪を行 う者を棄てずして、
 其救の爲に 痛悔を立て、 我等卑しくして 不當なる 爾の諸僕を、 此の時
 に於ても、 爾が 聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拝
 讚榮を 奉るに堪うる者となしし 主宰よ、 爾親ら我等罪人の口より

せいさん うた う なんぢ じんじ もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう
 も 聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由な
 つみ ゆる わ たましい からだ せい われら しょうがいぜんこう もつ
 らざる罪を赦し、我が霊と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て
 なんぢ つと え せしめ 給え、 聖なる 生神女と古世より 爾の喜を爲
 しし 諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ
 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も
 よよ
 世世に、



【 聖三祝文に代えて 】

ハリストスに おいて えせんを うけ しもの ハリスト スを
 於 洗 受 者
 きたあり、アリルイヤ、ハリストスに おい
 衣 於
 て えせんを うけ しもの ハリスト スをきたあり、
 洗 受 者 衣
 アリルイヤ、ハリストスに おいて えせんを う
 於 洗 受
 け しもの ハリスト スをきたあり、アリル
 者 衣
 イヤ、こうえいはちちとことせいしんにき
 光 榮 父 子 聖 神 歸
 す、いまもいつもよよに、アミン。ハリスト
 今 何時 世 世

スをきたあり、ア Ril イ ヤ。ハリストスにお於
衣

いてえせんをうけしものハリストスをきたあ
洗受者衣

り、ア Ril イ ヤ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾
は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 聖五旬祭主日 第8調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、其聲は全地に傳わり、其言は地の極に至る。

そのこえはぜんちにつたわり、そのことばはち地
其聲 全地 傳 其言 地

のはてにいたある。
極 至

誦經) 諸天は神の光榮を傳え、穹蒼は其手の作為を誥ぐ。

そのこえはぜんちにつたわり、そのことばはち地
其聲 全地 傳 其言 地

のはてにいたある。
極 至

誦經) 其聲は全地に傳わり、



そのことばはちのはてにいたある。
其言地極至

【 アポストロス 使徒經 3 端 聖使徒行實 2 章 1 節～11 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒行實の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 彼の^か日^ひ五^ご旬^{じゆん}節^{せつ}至^{いた}りて、使徒^{しと}皆^{みな}心^{こころ}を^{いつ}一^{ひと}にして共^{とも}に在^あり。忽^{たちまち}天^{てん}より聲^{こゑ}ありて、迅^{はや}しき風^{かぜ}の度^{わた}るが如^{ごと}し、彼等^{かれら}が坐^ざせる所^{ところ}の家^{いえ}に満^みてり。岐^{わか}れたる舌^{した}、火^ひの如^{ごと}き者^{もの}、彼等^{かれら}に現^{あら}れて、各^{かく}人^{じん}に止^{とど}まかれり。彼等^{かれら}皆^{みな}聖^{せい}神^{しん}に満^みてられて、異^い方^{ほう}の言^{ことば}を言^いひ始め^{はじめ}たり、神^{しん}の彼等^{かれら}に言^いわしめしが如^{ごと}し。時^{とき}に敬^{けい}虔^{けん}なるイウデヤ^{じん}人^{てん}、天^{てん}下^かの諸^{しよ}國^{こく}より來^{きた}りて、イエルサリム^おに居^{もの}る者^こあり。此^この聲^{こゑ}の作^{おこ}りし時^{とき}、大^{たい}衆^{しゆう}集^{あつ}りて躁^{さわ}ぎたり、蓋^{けだ}各^お己^のの方^{ほう}言^{げん}を語^{かた}るを聞^きけり。皆^{みな}駭^{おど}ろき且^{かつ}奇^あやしみて、互^{たが}に言^いえり、視^みよ、此^この語^{かた}る者^{もの}は皆^{みな}ガリレヤ^{じん}人^{あら}に非^いずや。如何^{いか}にして我^{われ}等^らは各^お我^のが生^うれし所^{ところ}の方^{ほう}言^{げん}を聞^きくか。我^{われ}等^らはパルフィヤ^{ひと}、ミディヤ^{ひと}、エラム^{ひと}の人^{ひと}、メソポタミヤ^{およ}、イウデヤ^{およ}及^{およ}びカッパドキヤ^{およ}、ポント^{およ}及^{およ}びアジヤ^{およ}、フリギヤ^{およ}及^{およ}びパムフィリヤ^{およ}、エギペト^{およ}、及^{およ}びキリネヤ^{およ}に近^{ちか}きリヴィヤ^ちの地^ち方^{ほう}に居^おる者^{もの}、ロマ^{きた}より來^{もの}りし者^{もの}、イウデヤ^{じん}人^{およ}及^{およ}び進^{しん}教^{きやう}者^{しや}、クリト^{およ}及^{およ}びアラヴィヤ^{ひと}の人^{ひと}たるに、如何^{いか}にして彼等^{かれら}が我^{われ}が方^{ほう}言^{げん}を以^{もつ}て、神^{かみ}の大^{たい}用^{よう}を語^{かた}るを聞^きくか。

(比較用 口語訳) 五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいには響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。さて、エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいたが、この物音に大ぜいの人が集まってきて、彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあつけに取られた。そして驚き怪しんで言った、「見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか。それなのに、わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか。わたしたちの中には、パルテヤ人、

メジヤ人、エラム人もおれば、メソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポントとアジヤ、フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者もいるし、またローマ人で旅にきている者、ユダヤ人と改宗者、クレテ人とアラビヤ人もいるのだが、あの人々がわたしたちの国語で、神の大きな働きを述べるのを聞くとは、どうしたことか」。

【 アリルイヤ 五旬祭主日 第1調 】

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{てん} 天は ^{しゅ} 主の ^{ことば} 言にて ^{つく} 造られ、^{てん} 天の ^{しゅうぐん} 衆軍は ^{そのくち} 其口の ^き 氣にて ^{つく} 造られたり。

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ} 主は ^{てん} 天より ^{かんが} 鑒みて ^{ことごと} 悉 ^{ひと} くの ^こ 人の ^{みたま} 子を視給えり。

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

司祭) (黙誦 : ^{ひと} 人を ^{あい} 愛する ^{しゅさい} 主宰よ、^わ 我が ^{こころ} 心に ^{かみ} 神を知る ^し 智慧の ^{ちえ} 浄 ^{いきぎよ} き ^{ひかり} 光を ^{かがや} 輝かし、

わ しねん め ひら なんと ふくいん おしえ さと たま わ うち なんと ふく
 我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福
 いたしめ おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ
 たる誠を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ
 なんと よろこ ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま
 爾の喜ぶ所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、
 けだし かみ なんと わ たましい からだ こうしょう われらなんと なんと
 蓋ハリストス神よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の
 むげん ちち しせいしぜん いのち ほどこ なんと しん こうえい けん いま いつ
 無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も
 よよ
 世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書 27 章 7 節 37~52 節、8 章 12 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) イオアン傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、節筵の末の大なる日に、イイスス立ちて、呼びて曰えり、人渴

かば、我に來りて飲め。我を信ずる者は、聖書に云える如く、其腹より活ける水

の川は流れん。之を言いしは、彼を信ずる者の受けんとする神を指せるなり、蓋聖

神未だ降らざりき、イイスス未だ榮を受けざればなり。民の中多くの者此の言を

聴きて曰えり、斯の人は誠に預言者なり。他の者は曰えり、斯れハリストスなり。又

他の者は曰えり、豈ガリレヤよりハリストス來らんや。聖書にはハリストスはダヴィ

ドの裔より、且ダヴィドの居りし處なるヴィフレムより來ると、云えるに非ずや。

是に於て民の中に、彼の事に縁りて、紛論起りたり。其中に或る者彼を執えん

と欲したれども、手を彼に措くなかりき。下吏は司祭諸長及びファリセイ等に返り

たれば、彼等之に謂えり、爾等何ぞ彼を曳き來らざる。下吏答えて曰えり、人未

だ嘗て斯の人の如く言いしことあらず。ファリセイ等は彼等に答えて曰えり、豈爾

等も惑わされしか。有司或はファリセイ等の中に彼を信ぜし者あるか。惟此の民、

律法を識らざる者は、詛わるるなり。夜イイススに來りしニコディム、彼等の中の

一人なる者は、彼等に謂う、豈我が律法は、未だ人の訴を聴かず、其行う所

を知らざる先に、人を罪するか。彼等答えて曰えり、爾も亦ガリレヤよりするか、

尋ねて見よ、預言者はガリレヤより起るなし。イイスス復衆に語りて曰えり、我は

世の光なり、我に従う者は暗を行かず、乃生命の光を獲ん。

(比較用 口語訳) 祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」。これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったもので、御霊がまだ下っていなかったのである。群衆のある者がこれらの言葉を聞いて、「このかたは、ほんとうに、あの預言者である」と言い、ほかの人たちは「このかたはキリストである」と言い、また、ある人々は、「キリストはまさか、ガリラヤからは出てこないだろう。キリストは、ダビデの子孫から、またダビデのいたベツレヘムの村から出ると、聖書に書いてあるではないか」と言った。こうして、群衆の間にイエスのことで分争が生じた。彼らのうちのある人々は、イエスを捕えようと思ったが、だれひとり手をかける者はなかった。さて、下役どもが祭司長たちやパリサイ人たちのところに帰ってきたので、彼らはその下役どもに言った、「なぜ、あの人を連れてこなかったのか」。下役どもは答えた、「この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした」。パリサイ人たちが彼らに答えた、「あなたがたまでが、だまされているのではないか。役人たちやパリサイ人たちの中で、ひとりでも彼を信じた者があつたらうか。律法をわきまえないこの群衆は、のろわれている」。彼らの中のひとりで、以前にイエスに会いにきたことのあるニコデモが、彼らに言った、「わたしたちの律法によれば、まずその人の言い分を聞き、その人のしたことを知った上でなければ、さばくことをしないのではないか」。彼らは答えて言った、「あなたもガリラヤ出なのか。よく調べてみなさい、ガリラヤからは預言者が出るものではないことが、わかるだろう」。イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ